京都医労連通信 2023年07月6日 NO1631

4年ぶりに訪問実施！！
いのちまもるキャラバン行動

医療・介護、社会保障を充実するために、医療・介護経営者や関係団体と幅広い共同をすすめる「いのちまもるキャラバン行動」は、36年目を迎えました。（コロナ禍の影響で2020年から訪問を中止し、郵送で要請書の賛同や署名・アンケートの協力をお願いしてきました。）

6月の1ヶ月間（北部：6月7日・14日／市南部：6月2日・9日・16日・28日・30日）、医療関係団体は7月以降、府内の病院・老健・地区医師会・労働組合など302施設を延べ66人の組合員が訪問しました。賛同署名は、国宛ては29施設、京都府宛ては29施設から集約し、7月20日に厚労省、7月28日に京都府に提出します。

今年の行動は、新型コロナウィルスの感染症法上の位置づけを2類から5類に変更された下で行われました。3年間のコロナ禍での現場で起こった状況や今後への不安、職員確保、患者・利用者の状況等を中心に懇談を行ってきました。

訪問時で意見交換した特徴的な内容は次の通り。

コロナ禍の影響は大きく、深刻な実態が明らかになりました。

「対話できた多くの病院・施設でクラスターが発生しており、対応の苦労や経営への影響が話されていた。コロナ禍では現場職員の奮闘で乗り越えてきたが、5類移行後も変わらず一般の人々と医療・介護労働者との認識のギャップは大きい、自粛疲れも。コロナ受入病院は補助金により黒字となっていたが、なければ赤字。コロナ非対応の病院や介護施設では少なすぎる補助への不満が出されていた。患者・利用者数が戻っておらず、物価高騰、光熱費上昇等、現在・今後の経営への不安も。診療報酬・介護報酬の引き上げの要望、コロナへの引き続きの補助、物価高騰への対策の声も出された。職員体制は、『コロナ禍で退職者が増えた』と答えた施設はそれほど多くなく、コロナ以前からの慢性的な人手不足と確保の苦労が出されていた。看護師確保は求人募集だけでは追いつかず、病院・施設の規模に関わらず紹介業者を利用している所は多くあった。高すぎる紹介料を払ってでも使わざるを得ない状況も。事務や看護助手等の無資格者の採用が厳しく、コロナの影響や医療・介護職場で賃上げがないことで医療現場が選ばれにくくなっているのではないか。薬剤師の採用も苦労していて、特に北部は地域全体で不足しているとも。職員の疲弊やモチベーションの低下に対し、辞めない工夫をそれぞれ行っています。看護大学・学校の定員割れ、卒業しても看護師にならない人も。京都市以外の地域では人口減少による就労人数の減少もあり強い危機感を抱いていました。若手の退職が増え、急性期からのバーンアウトで残業の少ない慢性期への転職も。」